

〈伝統〉をメンテナンスする—メキシコ・オアハカ市の芸術家集団 ASARO によるストリートアートを用いた実践

早稲田大学大学院人間科学研究科博士課程

山越 英嗣

【発表要旨】

メキシコ南部の小都市オアハカ(oaxaca)には、街路にポスターや壁画などといった、いわゆるストリートアート(streetart)を設置することで政治的な主張をおこなう集団が複数存在する。かれらはコレクティブ(colectivo)と呼ばれ、3~15名程度の芸術家によって構成されている。本研究発表では、コレクティブのうち最も規模が大きく、組織化されているASARO(asamblea de artistas revolucionarios de oxaca オアハカ革命芸術家集団)を対象として、発表者が2011年から2013年にかけて断続的におこなってきた現地調査の結果を報告するものである。

ASAROは2006年に結成されて以来、州政府がおこなう土地開発や多国籍企業の誘致などの新自由主義的政策に反対するアート作品を制作している。その際、かれらがモチーフとして多用するのは、「闘う農民の姿」や、「メキシコ革命の英雄たち」、あるいはとくに貧民から篤い信仰を受ける「グアダルupesの聖母(nuestra señora de guadalupe)」といった、メキシコの〈伝統〉にまつわる表象である。

このような、政治的に周縁化された人びとが共通のアイデンティティとなる表象をもちだして権力に抗するような事例は、世界のいたるところでみられる現象といえよう。しかしながら、ここで問題となるのは、現在のメキシコ社会において、「〈伝統〉の表象」を利用して民衆の心をつかむ戦略には限界が生じていることである。たとえば美術史家の加藤薫氏が述べるように、1920年代のメキシコ革命後に生じた「壁画運動」でも用いられたようなステレオタイプな「〈伝統〉の表象」は社会のいたるところに過度に氾濫しているため、もはや民衆のアイデンティティを刺激し統合するような特別な喚起力を有するものとはいえなくなってしまったのだ[加藤2003:235]。

そこでASAROは、再び民衆の意識を再統合するために、〈伝統〉を現代的な文脈に沿って再解釈したイメージを生産しているのではないかと発表者は考えている。こうしたプロセスを、「〈伝統〉のメンテナンス」と呼ぶことにする。本発表では、はじめにASAROがいかなる思想に基づいて結成された集団であるのか、そしてどういった出自の芸術家が参加しているのかをみたのち、かれらの作品を参照しながらASAROによる「〈伝統〉のメンテナンス」がどのようにおこなわれているかを分析する。さらに、発表者が2013年2月におこなった聞き取り調査の結果をもとにして、現地の人びとがかれらの作品に対してどのような感想を抱いているのかを検証していくことにする。

以上のような作業から、ASAROの生産するストリートアートが、地域社会に対してどのような働きかけをおこなっているのかを探ることが本発表の目的である。